
ブレイカー

るる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブレイカー

【Nコード】

N9831V

【作者名】

るる

【あらすじ】

朝のまんまの寝癖に、でかい黒ぶちメガネがトレードマーク。大好きなのは2次元！そんなちょっと変わり者の少女、白菜しろなが送る高校生活の物語。

ベースをやっている白菜は、同じクラスのギターをやっているという男子に話しかけたい、と思っているがタイミングがつかめない。しかし、ある日向こうから声をかけられる・・・。

プロローグ（前書き）

なんだか恋愛モノを書きたいという衝動に駆られたので、書いてみることにしました。

2次元と音楽をこよなく愛する少女の物語です。

ボーカロイドやけいおん等が好きな方に是非見て欲しいです

^ p ^

プロリーグ

朝、ぼんやりと天井を見つめる少女。

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
○

●
●
●
●
●
●
●
●
朝だ。

あれ・・・今日は・・・高校の入学式・・・

・ ・ ・ ・ ・ ああああああああつ！！！！！！！ もうこんな時間
！！！！！！

——今日から新学期。

ベタに寝坊し、ベタな寝癖をつけ、

これまたベタなことに、口に食パンを挟んで家を飛び出した。

「行ってきまふ！」

今日高校に入学する女の子、名前は白菜。しろな

今日から波乱の高校生活が始まる……！

プロローグ（後書き）

・・・すいません、

次に投稿するのはいつになるかわかりません（・ω・）
ノープランですが・・・待っていてももらえたら嬉しいですよ。

衝撃の自己紹介（前書き）

2話。意外と早く投稿できましたWW
WW

衝撃の自己紹介

寝癖のついた髪を風になびかせながら、自転車をぶっ飛ばして高校へと向かう白菜。

・・・入学式には、ぎりぎり間に合ったようだ。

大きな黒ぶちめがねをはずして顔の汗を拭い、大きなため息をつく。

つまらない入学式が終わり、教室で最初のHRが始まる。

高校生で初めてのクラスかあ。

高校の友達は一生涯の付き合いになるよ！って誰かが言っていた気がする。

とりあえず、第一印象が大事だよね！

よし、気合い入れて自己紹介しなきゃ！

・・・担任の話なんか聞かずに、自己紹介のことばかり考えていた。

自己紹介の時間になった。

みんなの自己紹介を興味深く聞く白菜。

へえ・・・勇輝くんってあんな遠いところに通うんだ。

なんか慎也くんって人面白そう・・・w

あ、凛ちゃんって人あたしと誕生日一緒だ!!

え!! 知哉くんってギターやってんの!?

・・・などと様々な発見をする。

そして遂に、白菜の番だ。

充分考えて、傑作の自己紹介ができたみたいだ。
元気に立ちあがり、笑顔を作る。

「白菜です！」

あらかじめ言っておきますが・・・私は『オタク』です！
2次元大好きです！

そしてベースやっています！

よろしく願いします!!」

決まった！・・・とでもいうような満足げな表情をしている白菜。

教室は、一瞬しらけた後、ちょっとざわめき出した。

が、担任が次の人を促し、また平凡な自己紹介が始まった。

・・・あれ、こんな自己紹介じゃダメだったかなあ・・・？

衝撃の自己紹介（後書き）

自己紹介がちょっとアレなんですけど・・・許して下さい^^；

ガールズトーク（前書き）

3話。今さらながら・・・登場人物の「名字」を考えてなかったW
だからいつそのこと名字なしで行こうかと思っています！
W

ガールズトーク

衝撃の自己紹介から数週間。

白菜は、自分と誕生日が同じだという凜という女の子と一緒に行動するようになっていた。

あんな自己紹介とはいえ・・・

白菜はフレンドリーな性格だったので、みんな明るい白菜を普通に受け入れてくれた。

「凜、明日って何日だっけ？」

「5月1日だよ！」

「あ、じゃあ席替えじゃない？」

「そうだねー！楽しみだぁ♪」

「ねえ、吹奏楽部って楽しい？」

「いきなりだねw

入ったばっかだからまだ全然慣れないけど、先輩とか優しくていい人ばっかだよ！

ドラムのらしいむ先輩とか、かっこいい人もいるし・・・！」

「ふーん・・・」

「どうしたの？吹奏楽部に入りたいとか??」

「いやいや、あたし音楽は好きだけど、吹奏楽部じゃなくて・・・」

「中学校の時合唱部だったから、合唱部に入りたいとか??」

「合唱部でもなくて・・・」

「じゃあ・・・何??」

「軽音部を、作りたいなって・・・。」

「おお、軽音部かあ！

白菜ベースやってるもんね！

それに、なんだっけ。今流行りのアニメ・・・『けいおん!』だっけ?」

「そうそう。影響されちゃってねw

でさあ。部活作るってなると・・・まず何をしなきゃいけないと思う?」

「うーん・・・

とりあえず、人集めたらいいんじゃない?」

「あー、そうだね。」

「ほら、知哉くんって、自己紹介の時にギターやってるって言ってなかった?」

「そうだ！知哉くんだよ!!」

・・・でもあたし、普通に男子に話しかけられないよ・・・」

「ええ！？白菜ってフレンドリーじゃん。」

「いやぁ・・・1回も話したことない男子は、なんか話しかけづらいよ。」

それに知哉くん・・・女子としゃべりそうにないじゃん？」

「ああ・・・草食系って感じだもんねw」

・・・と、このような感じの会話が、白菜と凜の間でいつも行われている。

明日は席替えかぁ。良いポジションになれることを祈ろう。
さて、帰ってベースでも弾こう！

席替えと知哉（前書き）

4話。みなさんは席替えで、メンバーとポジションのどっちを優先的に考えますか^^？

席替えと知哉

今日は5月1日。席替えの日だ。

放課後のSHRが終わり、担任がみんなにくじを引かせている。
白菜はメンバーよりポジションの方が大事らしく、言い席になることだけを祈っていた。

・・・席が決まり、机を動かす。

どうやら、凜とは離れてしまったみたいだが
白菜は真ん中あたりのちょうどいいポジションを獲得した。

一番前はもちろん嫌だし、
一番後ろも実は研究授業とかで先生から見られる時があるからね！
真ん中らへんが一番ちょうどいいのよ。

・・・などと考えていると、凜がやってきた。

「白菜ー！やったじゃん！」

「うん！この席めっちゃいいポジションでしょ♪」

「え？そうじゃなくて・・・」

「ん？」

「白菜の前の席、知哉くんじゃん！」

「・・・え、そうだったの！？」

「そうだったのって・・・あんたww」

ポジションのことはかり考えていたせいで、メンバーのことは眼中なしだったようだ。

白菜の前の席は、ギターをやっているという知哉だった。

「ね、これでさ、話しかけるチャンスできたじゃん！」

「あ、うん。そうだねえ！」

「じゃ、頑張ってー！わたしは部活行ってきます！」

「はーい！ばいばーい！」

・・・若干話しかけにくいけど、話しかけてみようかなあ。

・・・と思ったけど。

なんかほんとに話しかけづらい・・・

女子とあまり喋りたくないようなオーラ出してるような気がするもんなあ・・・

先生から配られるプリントを回されるときとか・・・

休み時間のちょっとした時とか・・・

いっぱいチャンスはあるとは思うんだけど・・・。。。

そう考えていたある日のLHR中に、知哉を通してプリントが配られた。

それは、自分の1週間の学習習慣を記録しなければならぬような用紙だった。

「今日のLHRは、その紙の目標設定とかを全部書いてしまう時間にします。」

担任が言った。

みんな、近くの席の人と話し合いながらそのプリントを書いている。

・・・おっと、これはチャンスじゃない!?
今こそ聞くべきだよ、「知哉くんってギターやっ
てるんだよね?」
って!

そう思って、白菜が話しかけようとしたその時。

知哉が後ろを振り向き、白菜に話しかけた。

「ねえ、白菜さん・・・」

席替えと知哉（後書き）

さあ、知哉は白菜にんと言ったのでしょかへpへ
次回はいつ投稿できるかな・・・
わかりませんが気長に待っていてください・・・w

初めての会話（前書き）

5話かな？ 知哉と白菜の会話ですねえ^p^

・・・前回の話「席替えと知哉」で、誤字を発見してしまいました
orz

暇な方は探してみてくださいs・・・じゃなくて

次からは誤字脱字がないように気をつけます！

初めての会話

知哉くんに話しかけられた!!!
も、もしかして「白菜さんってベースやってるよね？」とか聞かれ
ちゃったり・・・

「・・・白菜さん、この紙の『目標達成のルール』って、どんなこ
と書けばいいの？」

・・・ガクッ。

なんだ、この紙のことかぁ・・・w

でも向こうから話しかけてくれた!!! なんか嬉しい!!!

「ああ、『ケータイを封印する!』とかでいいんじゃない？」

「ふ、封印・・・（笑）
わかった、ありがとう。」

・・・知哉くんと初めて会話した。
内容は楽器のことじゃなかったけど・・・w
普通に向こうから話しかけてきてくれたことが、なんか嬉しいな。
女子とも普通に喋れるってことだね！

この会話をきっかけに、白菜と知哉は普通に喋るようになった。
他愛もない会話ばかりで、まだギターのことは聞けていないようだったが・・・。

ある日の昼休み。

白菜と凜が弁当を食べながら話している。

「白菜くやったじゃん！知哉くんと結構喋ってんじゃない？」

「な、なによ！別にそんなんじゃないし・・・！」

「はいはい、わかってるって！

で、ギターのことは聞けたの？」

「それが、まだ・・・。

普通の会話は出来るようになったけど、いきなりギターの話題に持ってけないじゃん？」

「早くしないと5月終わっちゃうよ！
席が近いうちに、絶対ギターのこと聞かなきゃダメだからね！
じゃないと軽音部つくれないよ！」

「そ・・・そうだねえ・・・」

「うーん・・・よし、じゃあ100円賭けよう！」

「え？w」

「5月中に白菜がギターのこと聞けたら、私が100円払う！
もし聞けなかったら、白菜が払う！」

「なにそれー（笑）

いいよ、わかった。100円のために頑張るから！（笑）」

「よし、その意気だ！」

今日は5月18日。5月終了まであと2週間ほどだ。
ケチな白菜は、100円という賭けをしたことで少しだけ話しかける意欲が増したようだった。

初めての会話（後書き）

またしばらく間が開いてしまうかもしれないけど
書く気は満々なので！w

よかったらマイペースに待ってて下さい＊

きっかけと100円(前書き)

ちよつと間があきましたが、投稿できました。；；
第何話か忘れてしまった・・・w
今回はちよつと長めです！

きっかけと100円

白菜と凜は、「100円」を賭けていた。

知哉にギターの話を持ちかけ・・・軽音部を作ることと相談する。

凜は、ちよっただけ臆病な白菜に少しの勇気と「きっかけ」を与えた。

・・・ある日のこと。

今日の数学の授業は、自習になったようだ。

クラスみんなは、それぞれ近くの人としゃべりながら、自習課題に取り組んでいた。

・・・またチャンス到来じゃん！

これは話しかけるべきだ！

「ねえ、知哉くん」

「ん？」

知哉が振り返る。

「この自習課題さあ・・・全然わからないんだけどW」

「あー・・・難しいよねえ。」

「知哉くん頭いいでしょ！？教えてよー！」

「いや、俺教えられるような脳は持っていないからなW」

「いやいや嘘でしょ！」

「なんか、家で結構勉強してるイメージがあるんだけど。」

「俺が？ないない！」

「白菜さんの方が勉強してるイメージあるよ。」

「そんなことないし！！」

「あたし最近、家に帰ったら音楽ばかり聴いて全然勉強しないよ
W」

「ああ・・・仕方ないよねW」

「・・・あ、音楽といえば、白菜さんってベースやってたよね？」

「・・・。」

「・・・なんてこった！」

「知哉くんの方から、その話を持ちかけられるなんて！！！！
予想外だった。」

そうだ・・・無理にその話題に持っていなくても、
こんなに自然に「音楽」の話題に持っていけたじゃないか。

きっかけさえあれば、よかったんだ。

「そうだよ!!」

知哉くんは、ギターやってるんだよね？」

「うん、そうそう。」

白菜さんって、どんなジャンルの曲を弾くの？」

「え・・・あたしは・・・ボカロとかアニソンとかしか弾かないよ
! (笑)」

「そっか。」

あ、アニソンと言えば、あの慎也もこの間ベース始めたらしいよ。
」

「え! 慎也くんもベースやってるんだ!!」

・・・ちょっと待って、アニソンと言えばって、どういうこと?」

「慎也も、オタクだから (笑)」

「・・・・ええええええ!」

まさか、このクラスにあたし以外のオタクがいたなんて。

「ちょっと、知哉くん! 後でメアド教えてよ!!」

慎也くんのも教えて！（笑）」

「おー、いいよ。」

「ありがとう。」

あたし、ベースやり始めたのは去年からなんだけど、
周りに楽器やってる人が全然いなくて・・・
全部独学で、ひとりでやってきたから・・・
セッションとか、スタジオに行ったりとかしてみたいなあって、
ずっと憧れてたんだ。」

「そっか。」

・・・じゃあさ、今度スタジオ行かない？」

「・・・え？」

「夏休みにね、慎也とスタジオ行かないか、って話してたんだよ。
人数も多い方がいいし、白菜さんの演奏聴いてみたいし。」

「・・・ほんとにいいの？」

「俺達でよければ・・・」

「うおおおおお！！！！」

ありがとう！ありがとう！！！！

ほんと嬉しいよ！！！！ほんとにありがとう！！！！」

自習中だったからよかったものの、白菜は喜びを抑えることができなかった。

・・・放課後、凜と白菜。

「・・・で、そんなこんなで、知哉さんと慎也くんのアドレス
ゲットしたんだ♪

夏休みにスタジオに行く約束もしちゃった!!」

「な・・・なんと・・・。」

自習時間にそんなにあんたたちが進展したとはね・・・!
びっくりだよw」

「で、100円は？」

「え？」

「あたしが知哉さんと楽器の話したら、100円くれるんだったよ
ね？」

「ふふふ、条件がちがうよ!

『白菜が知哉さんにギターのこと聞いたら』100円だったでし
よ？」

今日の話では、知哉くんが話持ちかけてきたみたいだったけど・
・？」

「え・・・うわあああああだまされた!!!!」

「あはは！

でもよかったじゃん、100円よりもっといいご褒美がもらえたんだからさ。」

「そうだね。凜と100円賭けてなかったら、話しかけなかったかもw

凜のおかげだね。」

あと数日で5月が終わる。そしたらまた席替え。
なんか・・・知哉ちゃんと離れるの寂しいな、とか思っている白菜なのであった。

きっかけと100円(後書き)

やっと話せましたね W
次回もお楽しみに！

夏、約束（前書き）

今回までちよつとぐだつて、次回から本格的に始動します！w
うーん・・・大げさに言うと、今回までがプロローグって感じでしょうか。

夏約束

やっとなんか知哉と楽器の話をして、ギターをやっている知哉とベースをやっている慎也のアドレスをゲットした白菜。

その3人で、夏休みはスタジオへ行こう！という計画を立てていた。

・・・7月20日。

今日は1学期の終業式だ。

・・・白菜は、知哉と楽器の話をして以来、特になんの変りもなく普通に生活していた。

6月に入って席替えがあり、知哉とは離れてしまった。

7月の席替えでも、あまり近くにはなっていない。

時々、慎也や知哉とメールするぐらいだった。

暑い体育館で終業式が淡々と進み、

教室へ戻って夏休み前のLHR。

白菜の学校は進学校のため、夏休みといっても「課外」というものがあり、

夏休みの前半と後半は学校で普通授業が行われる。

しかし白菜は、そんなだるいことは頭にならないようだった。

LHRも終わり、白菜は凜のもとへと向かう。

「凜一、やっと終わったね！」

「そうだねえ……」

「……と言っても、まだ学校はあるんだよ。
夏休みまで授業とか、めんどくさいねえw」

「そうだけどさ……」

「あたしはスタジオのことが気になって仕方ないんだよ！」

すると、

「白菜さん」

白菜に話しかけたのは、慎也だった。

白菜が慎也と直接会話するのは、これが初めてかもしれない。

「おお、慎也くん！どうしたの？」

「いや……スタジオの件なんだけど」

「キターーーーーー！！！！！！」

「いつにする？いつにする？？？」

「俺達は、今度の土曜がいいって思ってるんだけど」

「あたしはいつでもいいよ！！」

「今度の土曜ね、了解！
場所は？」

「実は、俺もスタジオ行ったことないんだよね W

この前ベース始めたばかりだし W

だから、場所は知哉が案内するってよ。

学校の正門集合で、いい？」

「OK！ありがとう！！！」

うわぁ、めっちゃ楽しみだぁ・・・」

「俺もだよ！白菜さんってベース上手そうだから、聞いてみたいし W
・・・それじゃまた！」

慎也は帰って行った。

凜も部活があるため、教室を後にした。

白菜は・・・スタジオに行くことの喜びで、顔のにやけを抑えられなかった。

・・・金曜日。

課外が終わると同時に学校を飛び出し、真っ先に家に帰る白菜。
帰るとすぐにベースを弾き出した。

明日はいよいよスタジオに行く日。

存分にベースを練習し、明日の用意をして・・・

知哉のギターを聞いてみたいと思いながら、眠りにつく白菜なのであった。

夏、約束（後書き）

本当は、スタジオでの話まで書きたかったんですが
きりがいいので、今回は何も進展してないですWWW
次回からが本当の物語のスタートです!!

スタジオと3人（1）（前書き）

やっと楽器を弾くシーンまで行きました！
今回は長くなってしまったので、2つに分割してうpします。

今日は時間あったから、コンタクトだよ!」

「休日もある姿だと思ってたよw」

「いつもあれだからねえw
時間あったら、ちゃんとするんだよ!
ほら、髪だってポニーテール。」

今までの会話は、知哉と白菜によるものだったが

「ポニーテール」という言葉を聞いて慎也が口を開いた。

「ポニーテール・・・w」

「何、慎也くんもしかして、ポニーテール萌えだとか!? (笑)」

「それ、キョンじゃん (笑)」

「あはは!!」

「やっぱ慎也くんってオタクだったんだなあ (笑)」

「はいはい、そのオタク2人、早くスタジオ行こう!」

「待ってましたあ!!!!」

・・・スタジオは、バスで10分ほどの場所にあった。
バスを降り、スタジオに入る。
慣れている知哉が1人で色々済ませ、
スタジオは初めての白菜と慎也は興味深々に中を見物していた。

知哉に連れられ、個室に入る。

「うわぁー!!!」

ここがスタジオかぁー!!!」

目を輝かせ、一通り室内を見わたした後、早速ベースをケースから出し始めた白菜。

「お、なんか弾くの？」

知哉が尋ねた。

「うん!!」

今一番はまってる曲があってね、ぜひ聞いてほしいから!弾きます!!

初音ミクの『ハートブレイカー』って曲。

知哉くんは、ボカロに興味ないかもしれないけど・・・この曲ギターもめっちゃいいから、聞いてて!」

白菜は喋りながら、ベースをアンプにつなげ、チューニングまで終えてしまった。

曲を流す準備もできたようだ。

ストラップを肩にかけ、軽く深呼吸する。

慎也と知哉が見ている中、白菜は笑顔で弾き始める――

スタジオと3人(1) (後書き)

(2) に続きます!

それと、この回で出てきた

super cellの「ハートブレイカー」という曲は、
実際にあるボカロ曲です。

小説のイメージとなる歌ということにしています。
よかったら、聞いてみてください!

スタジオと3人（2）（前書き）

後半です！

白菜が演奏を始めるところからです。

スタジオと3人(2)

♪♪♪♪

演奏に聴き入る、慎也と知哉。

慎也は、ベースをすらすらと弾く白菜に尊敬のまなざしを向けている。

知哉は・・・白菜の演奏に、ともかく聞き入っていた。

♪

演奏が終わる。

白菜は、満足のいく演奏ができたようだった。

慎也と知哉が拍手を贈った。

「白菜さん・・・やっぱ、思ってた通り上手いっす。

いや、思ってた以上に上手いっす!!!」

まじ尊敬しますわ・・・」

と、慎也。

「いやいや!!全然そんなことないよ!」

白菜が全力で否定していると、知哉が白菜に質問した。

「白菜さんって・・・ベース独学でやってるんだよね？」

「うん、独学。全部一人でテキストにW」

「今の、Tab譜？それとも耳コピ？」

「完全耳コピだよ！ちょっと適當になってるかもしれんけど・・・
W」

「いやいや、そうじゃなくて・・・

独学でここまで弾けるって、俺はかなりすごいと思う。

しかも耳コピのクオリティが・・・高い！」

「そ・・・そうなの！？

あたし専門的には何も分かんないから・・・

知哉くんに言われたら、なんかマジな気がするよW」

「いや、マジだよ。

多分・・・才能だよ。」

「マ・・・マジで・・・」

「次は俺が弾く。今から弾くやつ、洋楽だけど

次スタジオ来る時までに耳コピできそうかどうか、聴いてて。」

「あ・・・うん！もちろん聞いてるよ！！」

そして知哉の演奏。

・・・上手い！

安定感がやばい。

ギターの演奏を間近で見たことがなかったから・・・さらに上手く聞こえる！！

やばい・・・かっこいい！！

演奏が終わり、知哉が白菜に聞く。

「・・・どう？耳コピできそう？」

「あ・・・知哉くんのギターばっか聴いてて、ベース音聞いてなかったww

でも大丈夫そうかな。そんなに難しくはなさそう！
練習してみるよ！」

「おお、それじゃ、よろしく。」

「うん！・・・で、最後は慎也くん！」

「え、俺！？

俺始めたばっかでまだ全然弾けねーし！！
フルで弾ける持ち曲がないから、今回はパスで・・・w」

「えー！聞きたかったなあ・・・
じゃあ、また今度聞かせてよ！」

「オッケー分かった。練習しとくよ。」

・・・・そんな感じで、後の時間は喋ったり個人的に練習したりして、

3人はスタジオを後にした。

次来る時はセッションしようね!と、早々に次の計画まで立てていた。

3人それぞれが岐路について、それぞれに色んなことを思っていた。

白菜さんのベース・・・上手かったなあ・・・

俺も一応ベーシストなのに・・・女の子の白菜さんの方が断然うまい・・・。

白菜さんに追いつきたい!

それにしても今日の白菜さん・・・学校の時とは違った雰囲気ぢやよっと見とれてしまった・・・

・・・って何で俺は白菜さんのことばかり考えてるんだ!?

と、頭の中で独り言をつぶやく慎也。

知哉くんのギター・・・上手かった。

ていうか、かつこ良かった。

正直、弾いてる時かなりドキドキしてた気がする・・・

慎也くんもいい人だし、このメンバーで絶対軽音部作りたい!!!!!!

と、決意を新たにした白菜。

白菜さん・・・独学であそこまで弾けるとは、かなりすげえ。
絶対音感持つてるよな。

これからもっと練習すれば、もっと上手くなれる。

『ハートブレイカー』か・・・俺も練習してみようかな。

と、白菜に影響される知哉。

3人の感情が、動き出していた・・・。

スタジオと3人（2）（後書き）

やっとここまでたどり着いた〜！って感じです^^；
これから物語が（ぐだぐだと）動いて行く予定です！
W
W

軽音部（前書き）

この1カ月、多忙で全然書けませんでした・・・!;;;
これからちよつと暇になるので、またよろしく願います^^
小説内はまだ夏休みですねww

軽音部

白菜・知哉・慎也がスタジオに行った日から、1週間余りが過ぎていた。

学校では相変わらず、「夏休み課外」が行われているので、白菜達は毎日学校に通わなければならなかった。

——あの日以来、

白菜と知哉と慎也は放課後学校に残って宿題をするようになった。凜は部活があるため、いつもは残っていなかった。

そんなある日のこと・・・

机を3つくっつけて、3人以外みんな帰った後の教室で宿題をしながら、白菜達が喋っている。

「ねえ・・・わたし、前から思ってたんだけど」

「ん？」

「軽音部・・・作りたいくない？」

「・・・おおお！いいね、軽音部！」

普段はおとなしい知哉が珍しく大きな声で喜んだ。

「俺も賛成！」

・・・あ、でもさあ、部活作るってなると、
部室探したり、顧問の先生探したり、色々手続きしたり・・・
なんか意外とめんどくさそうだよー。」

と、慎也。

「確かにめんどくさい。でもさあ、学校で練習した方が絶対効率いいと思うのよ！」

それに、わたし達3人みんな部活やってないしね。
多少のめんどくさは、我慢だよ。」

「そうだなー。」

「あ、凜が吹奏楽部だから、ちょっと部室行ってみない？」

顧問の先生優しいらしいから、軽音部の顧問にもなってくれるかも！」

「おう！じゃあ、行こう行こう！」

（さすがB型の慎也と白菜さん。行動が早い！）

O型の知哉はそう思いながら、勢いよく教室を飛び出した白菜と慎也を追いかけた。

・・・吹奏楽部部室に辿り着いた3人。

ゆっくり扉を開け、中の様子をうかがう白菜。

「・・・失礼します。」

すると、部室の中には・・・

イヤホンをつけ、何かの音楽を聴きながら

それに合わせてドラムをバリバリ叩く少女がいた。

「「う・・・上手い・・・」」

白菜達一行は、その少女のドラムの上手さに見とれていた・・・。

軽音部（後書き）

今回はここまでです！

軽音部・・・わたしの学校じゃ作れなかったので、
その悔しさをこの小説にぶちまけたいと思います W W

ドラムと葉夢（前書き）

寒くなりましたねえ・・・
でも小説内では、まだ夏休みです！
W

ドラムと葉夢

イヤホンで音楽を聞きながら、それに合わせてバリバリドラムを叩く女子。

白菜・知哉・慎也の3人は、その演奏ぶりに見とれていた。

・・・1曲を叩き終えた少女が3人に気づき、
「ふう」と一息ついてからイヤホンを耳から外した。

「後輩に、用があるのか？」

3人に近づいてきた少女は・・・

『少女』と言うよりも、『女』という感じの
短髪でボーイッシュな雰囲気身をまとった女子だった。
胸についている組章を見ると、「3－5」と書いてある。

白菜が口を開こうとした時、

「あ！白菜じゃん！！知哉くんと慎也くんも。どうしたの？」

と、部室に偶然凜が入って来た。

「あ、えーっと・・・

実はわたし達、本格的に軽音部作ろうと思ってね。

吹奏楽の顧問の先生に相談しようとした所だったんだけど・・・」

白菜がそこまで言うと、

「ちょっと待て、軽音部作るって、ほんと？」

と、ドラム女子が口をはさんだ。

「え!？」

は、はい!今のところ、この3人しかいないんですけど・・・」

「そうか。」

だったら、顧問に相談するより私に相談するべきだな!」

「「「・・・え!？」」」

3人は訳がわかっていないようで、キョトンとしている。
その場を取り繕うように、凜がフォローする。

「あ・・・!えーっと・・・!」

こちらは、吹奏楽部の副部長でドラムの菜夢先輩!」

「らいむ」という名前を聞いて、白菜はふと思い出した。
凜と仲良くなった当初、凜との会話の中で

「ドラムのらいむ先輩とか、カッコいい人もいるし・・・!」
というワードを聞いたような覚えがあった。

「ああ、ゴメンゴメン！」

あたしは、^{らいむ}萊夢っていうんだ。

こうやってドラム叩くのが好きだ。

吹奏楽部は、もう引退したけど・・・あたしは進路先の関係で受験がないから、

こうやって部室に顔出してゐるんだよ。」

本人からの自己紹介も聞き、なんだかほっとした3人。

その後3人も、萊夢に軽く自己紹介した。

3人のことを気に入ったような口ぶりで、萊夢が3人に言う。

「あたし、『交渉』とか『取り引き』とか、得意なんだ。
だからさ、こうしないか？」

顧問と話し合って、絶対に軽音部作ってやつから、

その件は全部あたしに任せてくれ。

その代わり・・・あたしもドラムとしてお前らの仲間に入れて欲しい。」

その言葉を理解した3人の目が輝いた。

吹奏楽部副部長の頼もしい先輩が、軽音部の話に片をつけてくれる！
さらに、ドラムとしてバンドに参加してくれる！

「どうだ、乗るか？」

萊夢は笑顔で、男勝りに言う。

3人も笑顔で応える。

「
「
「
乗ります!
」
」
」

ドラムと菜夢（後書き）

やっとここまで来ました・・・！

今回のメインは菜夢先輩。

白菜達の2つ年上です。

ボーイッシュで口調も男っぽいですが、女の子です！
ここからが本番ですね！次回もお楽しみに^^

バンド結成（前書き）

文化の秋！ということでバンドですよバンド。

ちなみにわたしも、白菜と同じく

ベース弾いたりします。白菜みたいに上手じゃないけど。

バンド結成

音楽室で出会った、吹奏楽部3年生の菜夢^{らいむ}。

彼女が軽音部を必ず作ってみせると言い、

白菜達と約束を交わしてから数日が経過していた。

そして今日は、夏休みの課外授業、前半の最終日だ。

白菜は、「これからやっとな夏休みだ!」という開放感とともに、

「軽音部は出来たのだろうか・・・」と、菜夢のことが気になって仕方がなかった。

——最後の授業が終わり、終礼も終わった。

「やった〜夏休みだ!」

「俺、これから部活三昧なんだけどー(泣)」

「よし、今日から寝るぞ!」

などと言った声が聞こえてくる。

白菜は凜のもとへと駆け寄った。

「凜!」

「おー白菜! やっと課外終わったー!」

「そうだね。ん？今日は部活ないの？」

「うん、今日はないよ。」

「じゃあ、部室行かないの？」

「え？白菜、部室行きたいの???」

「え、いやあ・・・えっと、その・・・」

「あー分かった！！ らいむ先輩が気になるんでしょ！」

凶星であつた。

さらに、その近くにいた慎也が、会話に割り込む。

「あ！俺も実は思ってたw

あの先輩マイペースって感じだったから、もしかしたら
この前の件は忘れてんじゃないのか、とか・・・（笑）」

「おい慎也、お前が言うな！」

と、知哉もツツコミで会話に参加する。
すると・・・

「おい慎也、今の言葉、しっかりと聞いたからな」

と、背後で何やら聞き覚えのある声が・・・

「らいむ先輩!!!!」

いつの間に、菜夢が白菜達の会話を聞いていたようだ。

慎也が軽く怯えている中、菜夢がニツコリと笑ってこう言った。

「よく聞け、本日、我が高校に軽音部が誕生した!」

・・・菜夢の唐突な言葉に、4人は最初キョトンとしていたが、
だんだん実感がわき、4人の表情が明るくなる。

「やったあああああああ!!!!!!」

声をあげて喜ぶ白菜。

満面の笑みを浮かべる知哉と慎也。

凜も、喜ぶ3人を見て嬉しそうだ。

「やっぱ、あたしを信用して正解だったろ? (笑)」

部室とかも決まってるから、そうだな・・・

明日、顧問から聞いたこととかを話すよ。

授業はないけど、来れる?」

菜夢の問いかけに、3人とも「はい」と答えた。

「ついでに、ちょっとだけ楽器やらないか？」

菜夢の提案に、3人はさらに喜ぶ。

そこからさらに話は進み、明日の昼から楽器と機材を持って学校に集まり、

ミーティング兼軽い練習をすることになった。

――帰宅後、

白菜はスタジオで知哉が弾いていた洋楽のベースを練習し、ベースとアンプを学校に持って行く準備をした。

軽音部ができる。

学校で、仲間とともに楽器の練習ができる。

小さな夢が叶ったような気がして、白菜は上機嫌だ。

そして心のどこかで、早く知哉とセッションしたい、と思っていた。

バンド結成（後書き）

なんか長いような。まあいいか！
次回も読んでやってください^^

白菜、自覚する（前書き）

サブタイトルがフラグ W W W

いや、何でもないです！><

1話をちようにどいい長さで書いていくと・・・
予想以上に長編になりそうでコワイ。

白菜、自覚する

8月に入った。

さすがにロングヘアは暑いので、髪を高い位置で一つ結び・・・すなわちポニーテールにして、白菜は家を出た。

肩には自分の背丈ほどあるベース、手には見るだけで重そうなアンプを抱え、第一回軽音部の集まりへと急いだ。

集合場所の音楽室には、知哉と慎也がいた。

白菜のポニーテールを久々に見て、テンションが上がる慎也。

白菜の持ってきたベースとアンプを見て、テンションが上がる知哉。これからセックションするんだ・・・！と勝手に舞い上がり、テンションが上がる白菜。

それぞれの感情でテンションが上がりだした所に、菜夢がやって来た。

「おっす！そんじゃこれから、部室に移動しようかー。」

3人が菜夢につれて行かれた場所は、「視聴覚室」だった。視聴覚室の中は放送室のような感じだが、今は使われていないようで

ダンボールなどがいくつか置いてあった。

「顧問が、ここ掃除するなら使えるんじゃない？ って言ったから
今からここ掃除して、部室完成させよう！」

3人は莱夢に同意して、室内を片付けた。

意外に掃除は早く終わり、次に、莱夢が使うドラムを
音楽室から運ぶことになり……

……ドラムとアンプのセッティングも終わった。
ついに、軽音部の部室が出来上がった。
視聴覚室なので、防音もばっちりだ。

知哉が口を開く。

「ねえ、白菜さん、この前俺が弾いた洋楽、練習してみた？」

「あ、もちろん！ 完全に耳コピできてないかもしれないけど……」

「いやいや、1回合わせてみない？」

「おおお！ いいよ、やろうやろう！ ！」

白菜にとって初めてのセッション。

それを知哉とできるということが、なんだかすごく嬉しかった。

♪♪♪♪

弾いている間も、すごく楽しかった。

技術的にはまだまだかもしれないが、ギターとベースの一体感を感じる。

ベースを弾きながら、隣でギターを弾く知哉をちらりと見ると・・・
知哉と目が合った。その瞬間、白菜はドキッとして、あることを確信した。

『わたしは、知哉くんが好きだ。』

♪♪♪♪

演奏が終わり、見ていた慎也と菜夢が拍手する。

「お前ら、かなり上手じゃん！

あたしもドラム頑張らないとなー！」

「いやいや、先輩もドラムかなり上手じゃないっすか！」

と慎也が言うと、菜夢が思いついたようにこう言った。

「・・・ちょっと待て、あたしたち、これからバンドの仲間だろう？
男女とか学年とか関係なしに、『呼び名』を作っとかないか？」

「え？」

「あたしは、『先輩』って呼ばれるより、何か名前で呼ばれたいんだ。」

「そうですね・・・じゃあ、
先輩は『らいむ』で、『ドラム』なので、『ラム』ってのはどうですか!？」

と、半ば強引に白菜が提案する。

「・・・ラムか! うん、いい名前じゃん!
気に入った。これからあたしのことは、ラムと呼びなさい! w

・・・男子2人は、名前の2文字をとって
『トモ』と『シン』でいいんじゃないか?
問題は白菜だな。『シロ』にすると、なんか犬みたいだしw」

「ぶっ! 犬・・・(笑)」

「こら、そこのシン! 笑わない!」

「は、はいスミマセン(笑)
シロが駄目なら、音読みの『ハク』でいいんじゃないっすか？」

慎也が駄目もとで言うと、白菜はすんなりそれを受け入れた。

「ハク！いいね！！じゃあわたしは今後ハクで！」

4人とも、名前が決まった。

個性的なメンバーが集まった軽音部となったが、これからは楽しみで仕方がないようだった。

そしてさらに白菜は・・・

知哉とこれからも一緒に過ごせる事が、嬉しくてたまらなかった。

白菜、自覚する（後書き）

だいぶ端折ったつもりだったんですが・・・
それでも長いですね・・・無駄が多い文章でスミマセン。
しかも会話部分がちやちやして見にくいですよね；；

白菜⇒ハク

知哉⇒トモ

慎也⇒シン

菜夢⇒ラム

ということですよ！

文化祭＊1（前書き）

やっこの話までたどり着いた・・・

最近体調不良です。

みなさんも体には気をつけて（・ω・）。

文化祭＊1

軽音部ができた。

1年生であるハク（白菜）・トモ（知哉）・シン（慎也）と、3年生のラム（菜夢）という構成である。

夏休みは、何回か部室に集まって、個人的に練習をしたり、適当にセッションしたりした。

1回、4人でカラオケに行ったりもした。

白菜が大好きな曲「ハートブレイカー」を歌うと、知哉が「やっぱその曲いいね、俺も練習してみようかな」と言ってくれた。

知哉はボーカロイドに興味がないので、自分の歌を聞いて 曲を好きになってくれた事が、白菜はとても嬉しかった。

夏休み後半も、また課外が始まり、授業と部活の毎日が続いた。

そして遂に、2学期が始まり――

始業式が終わり、凜が白菜に話しかけた。

「ねえ、もうすぐ文化祭ってこと、知ってた？」

「え、もうそんな時期か！」

「もう9月だしね。」

そこで軽音部の白菜に頼みがあるんだけど・・・」

「ん？何？」

「文化祭に、出演して欲しいんだ！」

「・・・おおお！是非！喜んで！！」

・・・って、あたしが勝手に返事しちゃいけないか；

っていうか、なんで凜がそんな事頼んでくるの？」

「わたし、生徒会だから！」

「えっ！いつの間に・・・！」

「まあそんなことだから、期待してるよ！」

軽音部・・・バンドはやっぱり、ステージのメインイベントになるからね！」

「うん、ありがとう！！」

白菜は猛ダッシュで部室に飛び込んだ。

「みんな・・・！文化祭に出ないかって言われ」

ここまで言いかけて、菜夢が部室に飛び込んできた。

「おいみんな！！！！文化祭に出るぞ！！！！！！」

・・・菜夢の迫力に負けてしまった白菜だったが、
全員一致で、軽音部は文化祭に出る事に決定した。

文化祭＊1（後書き）

ちょっと長いので分割します！

・・・やっぱまとめる能力ないorz

頑張らねばです。

文化祭＊2（前書き）

もう少し書いたら、現実世界の時間の流れに
追いつきますね・・・！

文化祭＊2

文化祭の出演希望用紙を早々に提出し、部室に戻ってくる莱夢。

そして莱夢の独断により、

第一回軽音部ミーティングが始まった。

「さて、やっとこの季節が来たな！

軽音部と言ったら、文化祭の目玉みたいなもんだろ！？」

「そうだったんですか？」

「シンは黙ってろ！w」

「・・・はいw」

「あの、ラムさん！ 何曲ぐらいやればいいんでしょうか・・・？」

「あー・・・それは考えてねえな。

とりあえず、2曲ぐらいでいいんじゃないか？

アンコール用も含めて3曲練習するか！」

「俺もそのぐらいが無難だと思います。」

慎也を除いた3人で、会話が成り立っている。

それでも慎也は、嬉しそうに3人の話を頷きながら聞いている。

「よし、じゃあ、3曲用意しなきゃいけない訳か・・・」

「あのー・・・ラムさん」

「なんだシン、黙ってろって言ったじゃないかw」

「あ、スミマセン；

えっとですね・・・俺とハクって、ベースじゃないですか。

2人がベースでかぶってるので、なんだかなあと思って・・・」

「あ、確かにそうだな。シンもたまには良い事いうじゃないか。」

「たまには・・・」

ここで少し沈黙が流れた。

ハクとシンはどちらともベースをやっているので、今さら変えられない。

・・・沈黙を破ったのは、白菜だった。

「あ、ひとつ思いついたんですけど

2曲やるうちの、1曲は私がベース、1曲はシンがベース、
ってのはどうですか？

もちろん、ベースじゃない時はボーカルをするんです！」

「おおお！いいな！

なんだかんだ言って、ボーカルの存在忘れてたよW」

「忘れちゃだめですよW

あと、わたし・・・『ハートブレイカー』でボーカルやりたいです。

いいですか・・・？」

「おおおお！！いいじゃんハク！

あたしは賛成だ！ トモとシンもOKか？」

「もちろん」

「OKです！」

「よし、じゃあ1曲は『ハートブレイカー』で決まりだな！

シン、お前は何を歌いたい？」

「え！？俺っすか！？」

えーっと・・・うーん・・・言われてみると難しい・・・」

「シン、お前には自主性が欠けてるよな」

・・・と、このような感じで

ミーティングは終わりを告げた。

シンがボーカルをするもう1曲の方はまだ決まらなかったが、次の部活からは『ハートブレイカー』を練習しよう！ということになった。

文化祭＊2（後書き）

なかなかいいペースで書けました♪
今回はシンとラムの絡みが多いですね W W

文化祭＊3（前書き）

小説のラストまで一応話は考えてるんですが・・・
書く時は、ほぼノープランで書いてるようなもんです^^；
だからまとめる能力がないんですねWW
つい長くなっちゃう。

文化祭＊3

文化祭まで3週間となった、とある日の放課後。
今日の軽音部の部室に居たのは、白菜と知哉の2人だけだった。

「・・・シンとラムさん、来ないね。」

「シンは、居残りだって言ってたw
ラムさんは・・・やっぱ3年生だし、忙しいんだろ、多分。」

「そっか。」

——2人の間に沈黙が流れる。

ちよっとして、知哉はギターの練習を始めた。
白菜も適当に、歌やベースの練習を試みるが・・・

知哉の事が気になって仕方ない。

知哉と2人で、同じ空間を共有している。

そう考えると、なんだかドキドキしてきた。

知哉の事をまともに見れないよ・・・と思うが、
なぜか目は知哉の事を追いかけてしまう。

そんな事を考えてふと知哉を見ると、知哉と目が合ってしまった。

「ん？何？」

「・・・えっ！？ いや別に何でも・・・

ゴホン、えーっと、『ハートブレイカー』どんな感じ？」

取り乱す白菜の問いかけに、知哉は普通に答える。

「あれ、弾きやすいよ。

1番のサビまでは、なんとか弾けそう。合わせてみる？」

「おお！！じゃあ、やろうやろう！」

・・・こうして、知哉のギターと白菜のボーカルで、

「ハートブレイカー」が部室に響き渡った。

——一方、慎也は、居残りの課題を終えて部室へと向かった。
た。

「はあ、居残りとかほんと厄介だな・・・

まあ自業自得なんだけどなw」

などと独り言を言いながら、廊下を歩いていると、
後ろから菜夢がやって来た。

「お、シン。なんだ、居残りでもしてたのか？（笑）」

「え、その通りですけどww
ラムさんは何でここに？」

「いやあ、進路関係で色々だね。3年生は忙しいんだよ。」

「そうっすか。お疲れ様です。」

「ところでさ、シン、お前・・・」

「はい？」

「お前、ハクのこと好きだろ？」

「・・・・・・・・え!？」

驚きの表情を見せるが、すぐに顔が赤くなる慎也。

「ふふ、凶星か！」

やっぱりあたしに分かんないことなんてないんだよ。
頑張れよ、応援してやっから！」

「えええ、いやいやいやそんなこと・・・！」

ああ・・・やっぱ俺、ラムさんには敵わないっすw」

部室に辿り着く2人。

「ははは、大丈夫大丈夫、言ったりしないよ。」

・・・お、『ハートブレイカー』が聞こえる。」

「・・・ホントだ。」

やっぱハクとトモは上手いな・・・俺も頑張らなきゃ。」

部室に4人がそろった。

それぞれの感情はともかく、みんな、純粋に音楽が楽しいと思っていた。

文化祭＊3（後書き）

ついにシンの感情も明らかになってきましたね W W
ラムさん最強です。リスペクトです。

文化祭＊4（前書き）

なんかエラーが発生してしまっただ;;
ちゃんと投稿されてるんでしょっか(;;ω;;、)

文化祭＊4

文化祭まで、刻一刻と時は進んでいた。

慎也がボーカルをやる曲は、

白菜と知哉がセッションをした、洋楽ロックに決定した。

アンコールの曲は、みんなが知ってる曲がいいだろうということで

「小さな恋の歌」をやることにした。

1番は慎也がボーカルで白菜がベース、

2番はその逆、という形でやろう、ということになった。

4人とも、文化祭のステージで自分達の楽器を披露するということが初めてだったので、

かなり必死で毎日練習した。

忙しい時もあったが、必ず練習には4人がそろっていた。

——そして、ついに文化祭前日となった。

放課後、体育館で最終リハーサルが行われた。
生徒会の数名しか見ていなかったのだが、見ていた人たちは皆感動
していた。

打ち合わせも終わり、楽器を片付ける白菜達のもとへ 凜がやって
来た。

「白菜！お疲れ様！！ めっちゃすごかったよ！！」

「おお、ありがとう！ 見てくれたのかあ！」

「うん、私生徒会だからねっ！

あ・・・そうそう、生徒会として、ひとつ質問があるんだけど・・・
」

「はい、何でしょうか！？」

「白菜達のバンド、バンド名って、ある・・・？」

「え・・・？」

「バンド名、一応あった方がいいよねって
生徒会が言ってたんだ。」

「・・・ラムさん、バンド名、ありましたっけ？（笑）」

「・・・ないね（笑）」

「・・・そういえばなかったっすね（笑）」

「・・・ははっ（笑）」

4人は顔を見合わせて笑った。

練習に夢中で、バンド名なんて今まで考えた事もなかった。そして、ここでまた緊急ミーティングが始まった。

「うーん・・・バンド名か・・・」

言われてみりゃ なかなか思いつかねえな。

どうせなら、かつこいいネーミングにしたいじゃんかよ。」

「ラムさん！俺がとっておきのネーミングを」

「シン、お前は黙ってろ！w」

「いやいや 今回は真面目に考えてますよ。
なんかないのかなあ・・・」

ハク・・・トモ・・・スタジオ・・・セッション・・・
ハートブレイカー・・・
ハート・・・ブレイカー・・・

ブレイカー・・・！」

「ブレイカー・・・か。

なかなか良い響きじゃん、そう思わないか、トモ？」

「俺も良いと思います！」

シン、お前もたまにはいいこと言うな（笑）」

「おいトモ、お前までラムさんみたいに

俺をいじめないでくれよ（笑）」

・・・ハクはどう思う？ 『ブレイカー』。」

「・・・シン、いいよ！」

若干適当だけど、そこがまたいい！！！」

「適当じゃねーよ！！w」

「よし、じゃあこれからあたしたちは『ブレイカー』だ！」

明日、頑張ろうな！！！」

「「「はい！」」」

・・・こうして、半ば強引に バンド名も決定した。

明日は文化祭本番。

『ブレイカー』が校内デビューを果たす。

文化祭＊４（後書き）

この作品のタイトルでもある『ブレイカー』。
バンド名にもなっちゃいました（笑）

実は、特に意味はありません W W W
しいて言うならば、

「学年の壁も、男女の壁も壊しちゃおうぜ！」みたいな
意味が込められると思います ^^
ラムさんの信念そのものって感じですね。

文化祭*Final (前書き)

文化祭の章が終わりを告げますー(´・ω・｀)
まとめる能力なさすぎて、これから終わりが見えん・・・
どうでしょうWW

文化祭*Final

今日は、文化祭本番だ。

『ブレイカー』の4人は、緊張しつつも
すぐ本番を楽しみにしていた。

いつも遅刻ギリギリで学校に登校している白菜も、
今日はかなり早い時間に登校し、一番乗りでベースを練習していた。
するとそこに、知哉がやって来た。

「お、白菜さん今日は珍しく早いじゃん（笑）」

「うっ・・・！」

いやあ、さすがに今日は本番だからねえ」（笑）」

今日の白菜は、髪の毛もまっすぐストレートで、
ばっちりコンタクトをつけていた。

「いつも、今日が本番だ！って思って 学校来ればいいのに。」

「・・・？ トモ、それどういうこと？？」

「え？ い、いやあ・・・」

いつも、そのその格好で学校来ればいいじゃん、ってこと。」

「え？なんで？」

「なんでって・・・そりゃ・・・
そっちの方が、その・・・か、可愛」

「おっはよおおおおお!!」

・・・知哉が何か重要な台詞を言いかけたところで、
朝から無駄なテンションの慎也が入って来た。

やれやれと思う知哉。よく分かっていない白菜。

微妙な雰囲気の中に菜夢も登場して、4人は最後の練習をした。

——本番直前。

舞台裏で、凜が白菜にメイクし、ヘアスタイルも整えている。

「・・・よし、できた！」

白菜、めっちゃくちゃカッコいいよ!!」

「凜、ありがとう!!」

・・・なんか、あたし達がこうやってバンドやってるのも
元はと言えば凜のおかげって気がするな。

最初にラムさんと会った時、凜がラムさん紹介してくれたし。」

「いやいや、あれは偶然そこに居たから」

「ありや偶然じゃねえ、必然だ!」

ワックスで髪をくしゃくしゃにして、かつこ良くきまつている菜夢が横から口をはさんだ。

「あたしたちは、こうなる運命だったんだよ。」

知哉と慎也もその場に居た。

菜夢の力強い言葉を聞き、なんだか感動がこみ上げてくる。

「・・・本番だって。みんな、頑張って!!!」

凜が4人を後押しする。

4人は笑顔で応えた。

——本番。

ステージの幕が開くと、すごい歓声が起こった。

白菜は緊張していたが、4人でステージに立っている事が誇らしくて不思議と笑顔になっていた。

4人はアイコンタクトをとり、1曲目に入る。

「1曲目!! 『ハートブレイカー』!!」

白菜の元気なタイトルコールで、ブレイカーの演奏が始まった——

♪♪♪♪

わかってる？ わたしがキミをどれだけ好きか
無責任に 笑顔で話しかけたりしないでよ
期待した分だけ 落ち込むから

気がついて この想い

でも怖いの 嫌われたらどうしよう 嫌だよ

キミにとってわたしは 友達のまま？

教えて ハートブレイカー

♪♪♪♪

白菜は、自分の恋心と重ね合わせながら、
「ハートブレイカー」を歌いきった。

場内は大歓声に包まれた。

大きな拍手に、4人はかなり感動していた。

その後も、2曲目とアンコールを演奏しきって・・・
『ブレイカー』の初舞台は、大成功に終わった。

——文化祭後、打ち上げと称して4人でレストランへ行った。

「いや、本番めっちゃ楽しかったな!!!」

「うん!!」

緊張とか忘れてた。かなり楽しんで歌えたよ。」

「音楽ってやっぱり最高だな。」

「おう。『ブレイカー』は永久不滅だ!

これから先も、また新たに頑張ろうな!!!」

「「「はい!」」」

3年生でリーダー的存在の菜夢を先頭に、
いじられ役の慎也、しっかり者の知哉、そして白菜。
個性的なメンバーだが、
男女や学年の壁を超えた友情が、そこにはあった。

文化祭*Final (後書き)

文化祭終わっちゃいました(´；ω；、)

本文中にある「ハートブレイカー」の歌詞は、本物です！
いい歌なので是非聞いてみてください♪

或る日曜日（前書き）

文化祭終わって、一段落^^
ここからどうやって話を進めようかな・・・

或る日曜日

文化祭翌日、日曜日。

——白菜が目を覚ますと、時計の針は朝10時半を指していた。昨日の興奮と感動を思い出し、ベッドの中でひとりほほ笑む。そんな白菜の脳内には、知哉の姿があった……。

昨日の舞台上でギターを弾く知哉の姿を見て、白菜はさらに知哉への「好き」が募ってしまった。

（（やばい……昨日のトモめっちゃかつこ良かったよ。
今すぐトモと会話したい。

あ、そうだ、メールすればいいじゃん！

……でも、トモ一人にしたら、気持ちばれちゃうかな。
ここは、「昨日はお疲れ様でした」的な内容を、3人に送れば大丈夫か！）

こうして白菜は、ブレイカーのメンバー3人に、お疲れ様のメールを送信した。

もちろん、本当の目的は知哉と会話することである。

——知哉が目を覚ましたのは、午前10時頃であった。

特にすることも無く、

昨日のことを回想したりしながらぼーっとしていると・・・
白菜から一通のメールが届いた。

『昨日はお疲れ様でした！

ほんとに楽しかったです。

これからも、練習頑張ってくださいよう！^^』

「律儀にメール送るんだ。

やっぱ白菜さんって、女の子だよなあ・・・。」

そう思いながら、知哉はメールを返信した。

『お疲れ様です！

昨日の舞台上のハク、めっちゃ輝いてたよ！（笑）』

——慎也が目を覚ましたのは、午後1時頃であった。

眠い目をこすりながらケータイを見ると、メールが来ていた。

「・・・おおお！ハクからじゃん！！！」

なになに・・・『昨日はお疲れ様でした！

ほんとに楽しかったです。

これからも、練習頑張って行きましょう！^^』・・・か。

昨日のハク・・・メイクしてて髪もきまってる・・・

めっちゃくちゃ可愛かったな。

・・・ああ、俺は重症だなw」

慎也は、昨日の舞台上で白菜への「好き」がさらに募ったようだった。

――葉夢は朝早くから、家の手伝いをしていた。

昼食の休憩をとる時に、ケータイを開くと

白菜からメールが届いていた。

「ほお・・・『昨日はお疲れ様でした！

ほんとに楽しかったです。

これからも、練習頑張って行きましょう！^^』 ねえ・・・。

ふっ、わかったぞ！

こりゃトモに送ったメールだな。

あたしたちは付属品みたいなもんだろ（笑）

まあいいさ、ハクも可愛いしトモもなかなかかっけえし、
あいつらお似合いだと思うよあたしは。

・・・でも、シンが可哀想だな（笑）」

白菜の考えは、全てお見通しの菜夢なのであった。

——メール送信から5分。

白菜のケータイに、知哉から一番に返信が来た。

「トモからだ!!!!!!」

『舞台上のハク、めっちゃ輝いてたよ!』だって!!!!!!
やばい!!!! 嬉しすぎる!!!!!!」

メールを送ってよかった、と、
その日は知哉の事ばかりを考えて過ごした 白菜なのであった。

或る日曜日（後書き）

この話、我ながら好きです（笑）

ある出来事を、4人の視点から書く、みたいな。

そういう感じ、好きです。

次の話書くまで、ちょっと間が開いてしまうかもしれないです！；

白菜の才能（前書き）

お久しぶりです^^；

なかなか書く暇がありませんね；；

ぐだぐだと書いて行くつもりなんでよろしくです。

白菜の才能

文化祭が明け、一発目の学校では、

白菜達「ブレイカー」のことが話題に上がるようになっていた。

いきなり軽音部ができ、

文化祭のステージで素晴らしい演奏をしたのだから。

「ブレイカー」は、学校内で有名人と化していたのだ。

・・・その日の放課後。

今日の軽音部は、ミーティングをすることになっていた。

白菜が部室に顔を出すと、他の3人はみんな揃っていた。

4人がそろったことを確認し、菜夢が口を開く。

「さて、文化祭も終わったことだし！ 今度みんなで、スタジオ行かないか？」

「おお、いきなりですね！」

慎也が嬉しそうに返す。

「いや、実はさぁ・・・あたしの親戚がスタジオ経営しててね、その人がこの前の文化祭見に来てたらしくてさ、あたしらの演奏気に入ってくれたっぽくてさ！

今度タダでスタジオ貸してくれるらしいんだよ！」

「え、それはすごい！そんなチャンスめったにないじゃないっすか。」

知哉も嬉しそうだ。

「わたしも行きたいです！！」

白菜も同意し、全員一致で 今度スタジオに行くことが決定した。

——そして当日。

白菜・知哉・慎也は、菜夢に連れられて 例のスタジオへと向かった。

現地について、菜夢以外の3人は同時に同じことを思った。

「「このスタジオ・・・！」」」

・・・そう、菜夢の親戚が経営しているというこのスタジオは、夏休みに3人で初めて行ったスタジオだったのだ。

不思議な巡り合わせがあるもんだと感心した4人は、早速スタジオの中へと入った。

最初は、文化祭でやった曲をもう1度やってみたり、

1人ずつ演奏を披露したりしていたのだが、次第に各自で好きな事をするようになっていった。

そんな時、白菜が知哉に言った。

「ねえトモ、わたしにギター教えてよ！」

「・・・え!？」

いきなり言われた知哉と、それを聞いていた菜夢は驚いている。慎也はイヤホンで音楽を聴いていたため、気付いていない。

「ただの興味なんだけど、やってみたいなあって思ったから・・・！」

「おお！ いいよ、俺でよけりゃ教えるよ。」

「やった！ じゃあめっちゃ基礎からよろしくお願いします！ W」

こうして、知哉のギターレッスンが始まった。

知哉は白菜に、音の鳴らし方からコードまで、全て基礎を教えた。

その光景を見ていた慎也は、菜夢に

「なんでハクがギターを!？」

しかもトモにマンツーマンで指導してもらって!!」

と、慌てふためいた様子で尋ねた。

菜夢はそんな慎也にできるだけ優しく対応してやっていた。

・・・そして1時間後。

白菜はメジャーコードがすべて弾けるようになり、
ギターのコツをつかんだようだった。

「ギターは難しそうって思ってたけど、やってみると楽しい！」

「でしょ？」

・・・ってか、やっぱハクすげえな。才能あるよ。
俺だってこんなに早くコツつかめなかったと思うよ。」

「いやいやそんな！ トモの教え方が上手いからだって！」

「いやあ、ハクの飲みこみが早いんだ。
歌唱力もある、ベースも弾ける、耳コピも出来る。
それに飲みこみも早いなんて・・・」

・・・と、知哉が言いかけた時、

コンコン

個室のドアをノックする音がした。

白菜の才能（後書き）

区切りが良いのでここで切ります！
次もお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9831v/>

ブレイカー

2011年11月20日17時02分発行